

雅楽師

東儀秀樹さん



HIDEKI TOGI

【とうぎ・ひでき】1959年、東京都出身。高校卒業後、宮内庁に入庁。式部職業部で筆簞を主に担当。宮中儀式や皇居での雅楽演奏会をはじめ、海外での公演にも参加し、日本の伝統文化の紹介と国際親善の一翼を担ってきた。1996年にリリースしたCD「東儀秀樹」で脚光を浴び、2000年「TOGISM2」で日本レコード大賞企画賞を受賞。1996年にフリーに転身後は、作曲家として数多くの作品を手掛けながら、全国各地でコンサートを開催する他、俳優、タレント、コメンテーターと多方面で活躍している。

未知なる自分を求め続けて

INTRODUCTION

日本の伝統文化でありながら、どこか遠い存在だった雅楽。その雅楽を引つ提げ、全国ツアーではオリジナル曲で観客を魅了したかと思えば、テレビ番組では若者に大人気の曲を奏で喝采を浴びる。楽しそうに演奏する東儀秀樹さんの音楽を聴くと、雅楽が一気に身近な存在になる。

宮内庁の楽師からフリーの雅楽師となり八面六臂の活躍を見せる東儀さんに、雅楽を始めたきっかけから現在の活動まで話を伺った。

——東儀さんはお母様のご実家が奈良時代から続く雅楽の家系だそうです。雅楽は幼い頃から身近な存在だったのですか。

商社マンだった父の海外勤務にともなうて僕は外国での生活が長かったので、雅楽とはかけ離れた生活をしていました。たまに母の実家へ行けば、祖父が雅楽の楽器の調整をしている音を聴いて、「こういう音のする楽器があるんだ」と思うくらいです。家の中で雅楽の話題が出ることはほとんどなかったし、母も東儀家の血を受け継いでいるとは言え、雅楽は男子が継いでいくので、若い頃に趣味で笙を少し嗜んだ程度でした。

——お祖父様の雅楽を耳にされて、自分もやってみたいという気持ちにはならなかったのですか。

両親も僕も、まさか雅楽をやるなんて微塵も思っていなかったですね。

ただ、僕には物心ついた頃から普通じゃない音楽の素養があったらしく、幼い頃、親が買ってくれたハーモニカで、サラッと

音階を確認しただけで、父がよく聴いていたベートーヴェンの第九のメロディを間違えることなく吹いたそうです。

小学生の時にはピアノなんて習ったこともないのに、教室に置かれていたピアノで、テレビで聞いただけの歌謡曲を伴奏までつけて弾いていました。それは僕にとつて自然なことだったけれど、他の子にはできないことだと理解していましたし、自分には持つて生まれた音楽の素養があるという自覚がありました。

——確かに普通じゃない才能ですね。

幼稚園の頃からビートルズが大好きで、中学生になるとギターやピアノで表現することが面白くなってきました。高校ではロックバンドをやるようになり、「ギター」と言えば東儀」と言われるほどでしたが、

音楽がわかるだけに、努力が嫌いな自分にはテクニクが身についていないことにも気づいていました。

ロックやジャズに夢中だった僕はギタリストになりたいと思ったけれど、今のレベルではプロになれない。だからと言って、弟子入りして師匠のお世話から始めるものも向いていなさそうだし、がむしやりに練習するのも無理だなと、冷静に自己分析していました。

サラリーマンも性格的に向いていないし、進むなら音楽の道だろう。プレイヤーは無理でも、作曲家だったらできそうだななどと考えていた高校2年の時、母に「音楽の道に進みたいなら、雅楽にも目を向けてみたら」と言われました。「雅楽をやりなさい」ではなく、あくまでも一つの選択肢として

両親も僕も、まさか雅楽をやるなんて微塵も思っていなかったですね。



Gagaku Master
HIDEKI
TOGI



メキシコに住んでいた時、日本のことを誤解している人たちに、本当の日本を伝えたくて仕方がありませんでした。

提示してくれました。普通だったらそんなこと見向きもしないだろうけれど、僕がその提案を受け入れてみようと思ったのは、海外に住んでいたことが影響していると思います。

——どのように影響しているのですか。

メキシコに住んでいた中学生の時、日本のことを誤解している人たちに、本当の日本というものを伝えたくて仕方がありません。

でした。それに音楽だったらどんなジャンルでも料理できる自信がありましたし、雅楽の家系であることにも誇りを持っていたので、それらを総合して、雅楽の道に進んでみよう。それで何か違うなと思ったなら、その時はやめれば良いと考えたのです。

——その後、宮内庁式部職楽部楽生科の楽生となられています。どのように雅楽を習得されたのですか。

雅楽はすべて口伝で、まずは先生が口ずさむメロディを真似するところから始めます。一対一の授業で、先生がワンフレーズを口ずさんだら、楽生はそれを真似して、先生が次のフレーズを口ずさんで、また真似をするということを繰り返して、曲を完全に覚えたら楽器での練習に進むことができます。

——東儀さんは管楽器の中の簞箏ひちりきをメインで担当されていたそうですが、なぜそれを選ばれたのでしょうか？

同時に複数の音を鳴らすことができる笙は天から降りそそぐ光が音になったと言われる楽器で他に無い個性があるし、縦笛である簞箏は主旋律を奏でます。どちらにするか迷いましたが、東儀家が簞箏を大事にしていた家系ということを知っていたので、簞箏に決めました。

楽生は7年間のうちに、簞箏を含む管楽器をはじめ、琵琶や琴などの弦楽器、鉦鼓しょうこや太鼓といった打楽器など雅楽の全楽器の演奏、歌、舞に加えて、チェロやピアノ、声楽も習得しなければならず、期末試験も年に数回あります。僕は普通なら1回じゃ出せないような音階も1回でスパッと出せましたし、運動が得意で舞もうまくできたので、卒業までずっと試験でトップを逃したことはなかったです。

——その後、宮内庁式部職楽部の楽師となられてからは、ご自身として満足いく仕事ができるのですか。



僕にはレールどころか枕木の一つも無かった。 でも、自分の音楽に対する確信だけがありました。

大体思い通りにできていましたね。国賓が来日した時の歓迎演奏会でたった一人の舞人に選ばれることもありましたが、演奏の主軸を任されることも多かったです。

楽師になって10年で退職しましたが、振り返れば、その間には昭和天皇の御大喪や平成天皇の御即位の礼、皇太子の御成婚など、30年勤めても立ち会えるかどうかかわからないような大きな節目に立ち会うことができ、貴重な経験をさせてもらいました。

——10年で退職されたとのことですが、はじめから辞めることを考えていたんじゃないですか。

入った時は、先のことなんて何も考えていませんでした。ただ、宮内庁の楽師と言えば雅楽の世界では最高峰ですし、社会的な信用も高く、国家公務員ですから老後の生活も保証されています。それに雅楽は基本的に一人で行ける音楽ではありません。だから、定年までいるだろうとは思っていません。

——楽師は雅楽を広く知ってもらうことを目的に、勤務外の時間を活用してミニコンサートで演奏したり、雅楽を教えたりされることもあるそうですが。

そうですね。僕もコンサートでの演奏や企画をよく頼まれていましたし、オリジナル曲を披露することもありました。雅楽は難しいという印象を持たれがちだけれど、僕が作る曲はポップスと同じような感覚で楽しめるので、すごく聴きやすいのだと

思います。最初は数十人くらいだったお客さんが、回を重ねるごとにどんどん増えていきました。

コンサートへの出演依頼も次々と舞い込むようになり、次第に仕事との両立が難しくなっていました。個人として発表の場がほしいけれど、仕事で周囲に迷惑をかけたくないという気持ちもあった。やりたいことが思うようにできないことがフラストレーションとなつて、37歳の時、退職を決意しました。

——退職してもやっていける確信はあったのですか。

「退職するからには、かなりしっかりしたレールを組み上げているだろう。その上で、乗り換えるのだろう」と周りには思っていたようですが、僕にはレールどころか枕木の一つも無かった。でも、自分の音楽に対する確信だけはありました。「僕の音楽を楽しんでくれる人は必ずいる」という確信です。だから、心配は何もありませんでした。

——ご家族は反対されなかったのですか。

東儀家の祖父母は、僕が宮内庁の楽師になったことを何よりも喜んでくれました。「孫の代で戻った」と言つて。母も同じ気持ちだったと思いますが、言い出したら絶対に引かない僕の性格をよく知っているから、辞めることについて何も言いませんでした。父は固い人間で、僕が国家公務員として勤め上げること以外の道を考えていな

かったはずなので、相当驚いたと思います。ただ、僕がコンサートで演奏すると、皆さんが楽しんだり、面白がつてくれている様子は両親も見えていたので、「これが続くなら、きっと大丈夫だろう。それほどメジャーにはならなくても、音楽家としてやっていけるかもしれない」と思ったようです。

——楽師だった時と比べ、フリーになられてから作曲の姿勢に変化がありましたか。

全く変わっていません。というのも、僕は「こんな曲をひらめいた!」と、楽しく作曲しているので、どこにいても変わらないのです。今も初心と変わらず、無邪気に楽しく曲を作っています。

——「生活のため」というプレッシャーは、無いのでしょうか。

納期に間に合うかどうか分からないとか、曲のアイデアが出てこないという危機感はずっとあります。というより、納期よりかなり早く出来てしまいます。「いつだって、どんな曲だって提供できる」と思っています。

——やりがいという点で、楽師をされていた時とフリーで演奏される時は、どのような違いがありますか。

どちらにもそれぞれ素晴らしいやりがいがあると思っています。宮内庁の楽師としての仕事は、1000年以上の歴史と伝統が積み重なってきた仕事で、気持ちの良い重責がありました。言わば、歴史に自分自身

人はマイナスなことを想像したがるけれど、 一步前に踏み出した人だけが手にできるものがある。

を寄り添わせるやりがいです。楽師だった頃は、「自分は今、すごい仕事をさせてもらっている。ありがたいな」という気持ちで臨んでいました。フリーになってからは自分一人で考えて、自分の想いや好みを全部反映できるというやりがいがあります。それぞれタイプが異なるやりがいで、どちらも同じくらい充実感があります。

——東儀さんは、雅楽の魅力はどこにあるとお考えですか。

1000年以上も昔から変わらず同じことができている体制や守り続けられている価値観に、僕はまず感動します。それに流石に翻弄されることなく残ってきたのは、神や仏を相手にしていたからじゃないかと考えています。自分を表現することが音楽なのに、演奏者の自我を表現することをよしとしなかった価値観。それって普通あり得ないじゃないですか。自分を捨てて身を寄せるって、すごく魅力的だなと。

雅楽は完成度が高く、全くゆるぎがありません。だからこそ、宇宙の音楽とも言われるのだと思います。雅楽のメロディを奏でるのは3つの管楽器です。笙は降りそそぐ天の光を表し、箏は地上の音を表し、横笛の一種である龍笛は飛び回る龍の鳴き声から空を表しています。それらを合奏すること、天、地、空を一つにする、つまり宇宙を表現しているのです。だからこそ、どの時代においても新鮮に響くのではないのでしょうか。

雅楽が完成した当時、他の音楽もあつたに違いないけれど、完成度が低い音楽は時代の流れの中で淘汰されてきたのだと思います。力強い完成度をもった雅楽は、これから先もずっと残り続けるでしょう。

雅楽を堅苦しいと思うのは、儀式のイメージが強過ぎたり、どう聴けばいいかわからないという先入観が邪魔をしているからです。先入観をなくして音楽に身を委ねてみれば心地いいのに、雅楽に対する先入観の強い人がまだまだ多いと感じています。

——私も、どう聴けばいいのかわからない一人です。

雅楽の難しい曲を聴かされると、群れた音の中で耳がどこに焦点を定めたらいいかわからないかもしれないけれど、例えば「箏は人が歌うように吹いて、音を出している」ということを箏を使いなから説明すると、「あつ！本当だ」と理解できて、その瞬間から箏に耳が傾く人がいます。箏も「パイプオルガンのルーツなんです」と説明すると、「教会で響いているような音なのに、雅楽なんだ！」と面白がって、雅楽に興味を持つてくれる人もいます。

——そうやって雅楽の普及に努められているのですか。

普及というより、僕は、日本人は日本を知ることを最優先すべきだと思っているのです。外国人と向き合った時、英語が話せることより、日本の文化を知っていることのほうがずっと評価されます。英語が話せ

ても、自分の国の文化について何一つ説明できなければ相手にされません。真の国際人は自分の国のことを知っているし、日本人だったら雅楽を知っておいてほしいと。

外国人から日本の音楽について尋ねられた時、「そう言えば、東儀さんがやってる雅楽があつたな」と思い出してくれたら嬉しいですね。

——学校に招かれて雅楽の話をするのもあるそうですが。

そうですね。例えば、生徒の前で笙を持つてデモンストレーションする時、「この楽器を吹いてみたい人、手を挙げて」と尋ねます。でも、最初からスバツと手を挙げる生徒は滅多にいません。そこで、「もう一度聞く。東儀秀樹と間接キスをするチャンスだぞ」と冗談を言ったりしてようやく手が挙がったら、その生徒をステージに呼んで笙を吹いてもらいます。

笙は一見難しそうだけれど、初めてでも音は出ます。その音を聴いて皆が驚くし、何より吹いた生徒自身が驚きます。その時、僕は「A君はきれいに音が出せたね。だけど彼のすごいところはそこじゃない。誰も手を挙げないのに一人だけ挙げたところがすごいんだ」と言うのです。「手を挙げられなかった人は、皆の前で音を出せずに凹んでしまう図ばかりを想像してしまっただよね。でも、初めてなんだから、できなくて当たり前。それなのに、なぜ失敗する図を優先するのか？」と。



——なかなか耳の痛い話です…。

「人はマイナスなことを想像したがるけれど、一歩前に踏み出した人だけが手にできるものがある。今日の場合、手を挙げたA君だけが、笙の音が出せたという感激を持ち帰ることができる。音が出なかったとしても、難しい楽器なんだと体感したことで、誰よりも先に行くことができる。失敗を怖がっている場合じゃないだろう？」と。そういう話をよくしていますね。

——「失敗を恐れず、一歩を踏み出す」。日本では苦手な人が多い気がします。

僕は3つの選択肢を示されて「どれを選ぶ？」と尋ねられたら、「3つを同時に選べないだろうか」と考えます。そうすれば、本当に自分に向いていたものが残り、途中で落ちていったものは向いていなかったことが早くわかります。最初に1つだけを選んでしまうと、結局、時間を無駄にしてしまうと思うのです。

——そういう発想だからでしょうか。東儀さんは趣味も多いですし、仕事も私生活も含めて人生を楽しんでいる感じがします。

僕は好奇心旺盛だから、人が楽しそうなことをしていると自分もやってみたいくなる。それに「同じ人間なんだから自分にも絶対にできるはずだ」とプラスに発想します。

例えば、誰かが乗馬している姿を見たら、自分の姿と重ね合わせながらつぶさに観察して、実際、自分が馬にまたがった時には「さっき見た通りにやればいいだけ」と頭の中のイメージを再現しようとしています。「自分がさっきやっていた」感覚でスタートできるので早く習得できますし、もし失敗しても、そこでへこたれることはありません。そのほうが早く楽しむことができます、効率的です。

——なるほど。そのような方法でいろんな楽しみを見つけてこられているんですね。では、最後に伺います。東儀さんが人生で大切にされていることは何ですか。

後先を考えないことです。皆、子どもに目標を定めなさいって教えるでしょう？でも、目標を定めた瞬間にそっぽ向いてしまうことって、勿体ないと思うんですよ。目標しか見えていないと、せっかく目の前に自分に一番向いているものが近づいてきても、それを排除してしまえますよね。

でも、僕のように目標が無い人は、いつも好奇心を持って面白いものはないかと探していて、気になるものがあればすぐに寄り添うことができます。寄り添ってみてダメだなと思ったら、別の方向で新しいものに出会えばいいわけだし、ジグザクでも自分の直感で進んで行ければ、死ぬ前に「ああ、人生、面白かった」と言えるんじゃないかと。

だから、僕は自分が何者かも決めないことにしています。今は雅楽師だけれど、今日の帰り道で「これだ！」という何かを見つけて、「もう雅楽なんてやっている場合じゃない」となる可能性だってあるわけじゃないですか。未知の自分を常に求め続けていけば、目標なんか定まなくていいと。死ぬまでの間に、まだまだ僕の知らない東儀秀樹に出会おうと思っているので、じつとんかしていただけないです。

——その気持が新しいことにチャレンジされる原動力ですね。本日はお話しいただき、ありがとうございました。これからの活躍も楽しみにしています。

(インタビュー／ライター 更田 沙良)